

【書評】

ドミニク・ブルク、ネリー・ホギキャン編
『女性と移動』ラヴァル大学出版、2011年
Dominique Bourque et Nellie Hogikyan (dir.),
Femmes et exils, Presses de l'Université Laval, 2011.

山出裕子
YAMADE Yuko

1960年代におこった、「静かな革命」と呼ばれる社会運動（あるいは文化革命）の後、ケベックの文学では、女性作家たちによって、フェミニスト的特徴を持った女性が描かれるようになった。その後、1970年代の第2派フェミニズム運動を経て、女性作家たちは、自分たちの経験を書くことで、1つの文学ジャンルを作り出した。近年では、ケベックの女性文学の1つの特徴となった「女性の文体」は、移民によって再生され、ケベックの女性文学の中に新たな特徴を作りだしている。

しかしながら、1980年代ごろから頻繁に見られるようになった、移民女性たちが作りだしている新たなケベックの女性文学は、それまでにケベックの女性たちが作り出した特徴を踏襲してはいるものの、フェミニズム運動で見られたような、女性の権利を主張するためのものではない。むしろ、移民女性が、ケベックの文化を吸収しながら作り出した、新たな文化を描くものであるといえる。例えば、アラブ系女性の作品では、フランス語とは距離のある言語（アラビア語）を母語にしていることから、常に、言語を通して、文化的差異を感じながら生活している女性たちの様子が描かれている。そして、その距離感に対する意識が、彼女たちの文学の特徴となっているのである。

1990年代になると、アジアからの移民たちが作品を描くようになり、ケベックとアジアという新たな文化空間で作り出されるケベックの女性文学は、さらなる色彩を帯びてきている。そうして、母国を離れ、ケベックで創出される移民女性たちの作品は、ケベック文学において、ますます注目を集めている。2011年に出版された『女性と移動』(*Femmes et exils: Formes et figures*)では、そうしたケベック文学に見られる近年の傾向をさらに系統づけ、移民女性たちが描き出す文学の多彩さを、明らかにするものである。

本書は、2部に分かれており、第I部は *Thématique de exils* と題されている。ここでは、すでにポストコロニアル文学や移民文学では盛んに論じられてきた、移民文学に見られる自伝的要素や、アイデンティティなどについて分析した論稿が収められている。また、第II部は *Poétiques exiliques* と題されており、移民した後に様々なエスニシティを持つ女性作家たちが作り出す、文化の翻訳性や混血性などをテーマにした分析が見られる。

第I部には7つの論稿が収められており、さらに3つのテーマに分類されている。まず初めに *A. Exile intérieur/extérieur* というテーマがあげられており、例えば、Anne Thibeault-Bérubé による、ケベックの中国系移民作家であるイン・チェンの作品の分析が見られている。この分析では、国外へ移動する際に見られる、祖国との離別とそこから生まれる新たなアイデンティティの形成の過程について明らかにされている。

続く、*B. Identité exilique* では、ケベックやフランスにおけるアラブ系移民女性の作品に見られる、移動によって新たに形成されるアイデンティティについて論じられている。例えば、モントリオール大学比較文学科の教授である Amaryll Chanady は、レバノン系のケベック移民 Abla Farhoud の作品を通して、主人公の女性たちによるレバノンの記憶の再生と、そこから新たに創出されるケベック文化の特徴について、インド系ポストコロニアル理論家の Homi K. Bhabha や、ジャマイカ系の Stuart Hall などの理論を用いて、分析を行っている。さらに、René LaFleur は、アルジェリア系フランス移民であり、アカデミー・フランセーズのメンバーともなっている Assia Djebar の作品に見られる、アイデンティティの変遷について論じている。LaFleur は、特に Djebar の作品 *Les Nuits de Strasbourg* に見られる *« Alsagérie »* の概念について詳しく論じているが、ここでフランスの移民文学に見られるアイデンティティの形成過程と、ケベックの移民文学におけるそれとが、比較的観点から論じられていることは、大変に興味深い。

第I部の3つ目のテーマとして、*C. Exil générationnel* があげられており、ここでは、祖国の記憶と文化に対する移民世代間の違いが論じられている。こうした、移民たちの母国文化に対する世代間の差異は、他の文化圏の移民文学（例えば、日系ブラジル文学など）でもしばしば見られものであり、そうした普遍的とも言える移民文学の特徴を、ケベック文化のコンテキストで

論じられることで、ケベック文化の独自性が、より強調されている。

第Ⅱ部にもまた3つのテーマが設けられ、8つの論稿が収められている。最初のテーマは D. *Les voies de la traduction* とされ、アラブ系の女性作家の作品に見られる、フランス語とアラビア語という言語の差異を通して行われる、文化翻訳とそこから作り出される新たな文化についての分析がなされている。

続いてのテーマは、E. *Les jeux de translation* とされ、さらに異なる言語を母国語とした女性移民による作品の分析が取り上げられている。例えば Yuko Yamade による、日系ケベック人作家アキ・シマザキの作品に関する分析では、日本文化がフランス語で翻訳されることによって生み出される、新たな文体やそこにみられる文化翻訳性、また、その土壌となるケベック社会の文化混血性 (*Hybridité culturelle*) について論じられている。

本書の最後のテーマとなるのが D. *Oser l'invention* であり、ここでは、コート・ジボワールからの移民であり詩人でもある Angèle Bassolé-Ouédraoga が、本書のために書き下ろした韻文作品が紹介されている。この作品では、実際の移民である作者が、カナダという新しい国で、母国の記憶を再生しながら、新たなアイデンティティを模索している様が描かれている。

本書の持つ大きな特徴の1つとして、収められている論稿の分析の多くが、アラブ系やアジア系という近年のケベックの移民文学で特に注目されている文化背景を持った作家やその作品に関するものであることがあげられる。さらにそれを、文化や言語によって分類するのではなく、移民文学に見られる主要なテーマ（アイデンティティ、文化翻訳性、新たな文化的特徴の創出など）を通して分析することで、エスニシティを越えたつながりによって、ケベック文学が再構築されている様が強調されていることは、特に注目すべきであろう。

残念ながら、本書の日本語訳は出版されていないが、以上のような、ケベックの移民文学を扱った日本語の著書としては、小畑精和著『ケベック文学研究』の第6部において、中国系のイン・チェンの作品の分析がなされている。また、真田桂子著『トランスカルチュラルリズムと移動文学』では日系のアキ・シマザキや、さらには、ユダヤ系の女性作家レジーヌ・ロバン等の作品について論じられている。山出裕子著『ケベックの女性文学』の第5、6

章では、ケベックのアラブ系女性作家や、本書でも分析されている、アジア系女性作家の作品が取り上げられている。また、同著者の『移動する女性たちの文学』では、フランスとケベックの日系女性作家による作品の比較を通して、両文学に見られる移民作家の作品的特徴の違い、さらに、そこに見られる両国の移民やその文化の受容に対する差異についての検討がなされている。

ここにあげたような、日本語によるケベック文学に関する書籍の多くに、移民作家の作品に関する分析がなされていることは、特に強調されるべきであろう。それは、ケベックの文学における、移民たちの役割を明らかにしていると言え、現在のケベック社会における移民のあり方を見ても、ケベック文学の移民作家の作品の重要性が、ますます増していくことは明らかである。ゆえに、エスニシティを越えた移民文学に対する視座を持つ本書は、今後のケベック文学研究の方向性を探る上で、参照すべき書であると言えるであろう。

<参考文献>

小畑精和『ケベック文学研究－フランス系カナダ文学の変容』御茶の水書房、2003年。

真田桂子『トランスカルチュラルリズムと移動文学－多文化社会ケベックの移民と文学』彩流社、2006年。

山出裕子『ケベックの女性文学－ジェンダー、エクリチュール、エスニシティ』彩流社、2009年。

———.『移動する女性たちの文学－多文化時代のジェンダーとエスニシティ』御茶の水書房、2010年。

(やまでゆうこ 明治大学兼任講師)